

三井のリフォーム住生活研究所 所長 西田 恭子

筑豊 石炭王の邸宅

福岡県飯塚市を訪れる機会があり、このコラムにも行きたいと書いた、NHK朝の連続テレビドラマ「花子とアン」で注目された柳原白蓮にまつわる旧伊藤伝右衛門邸に足を伸ばした。観光パンフレットのキャッチコピーが「世紀の恋の物語」となっていてびっくりしたが、現地の小冊子の表題は「筑紫の石炭王が遺した粹の世界」だった。

ポタ山や、炭鉱夫とその家族の娯楽として親しまれてきた嘉穂劇場も現存する、大規模炭鉱の痕跡が残る街だ。この築八〇年を超える嘉穂劇場も一五年前の大雨による浸水で、大きな打撃を受けたが、この劇場を愛する津川雅彦氏ら芸能人仲間が尽力し再興された。

さて旧伊藤伝右衛門邸は、大正天皇の従妹であり、気位の高い白蓮と、自らがツルハシを握って極貧からのし上がった石炭王伝右衛門が過ごした館だ。

二人の新たな人生を彩るため、莫大な費用をかけて増改築がなされたが、白蓮は恋人宮崎龍介へと出奔してしまった。なんだが残念

な思いがする建物だ。当時の一般生活では珍しく、食事は広い食堂で済ませ、応接間には豪華なマントルピースとイギリスから取り寄せたステンドグラスがあり、ヘリンボーン貼りの趣のある床が敷き詰められて

いる。白蓮の生活にマッチするように、純和風建築の中に洋風のものを取り入れた館である。個性に合うライフスタイルへの対応を、この時代からやっていたのには感動した。しかし、このような贅を尽くした素晴らしい建築物であっても、白蓮の慕う人への心を留める力はないのだろうか。

白蓮は去って行ったが、今でも訪れる人があとを絶たない建物であることを思うと、大正二年に行われた大規模な増改築工事と、今に至るまでに行われてきた適切な建物管理の価値は大きく貴重だといえる。

この建物も一時期は会社所有となり、接待の場として利用されたという。

邸内には立派な本座敷があり、ここで何億という大きな商談が行われたかもしれない。訪れた時にこの本座敷は、「いづくか雛のま

つり」の一つとして京の花見をテーマに無数の雛人形が飾られていた。

今回ご案内いただいたのは、八〇歳代のかくしゃくとした男性。民間会社所有だったころ、そこに勤めていた方で、語り部のように案内してくださった。実際は、建物への愛着がこちらにも伝わってきた。

最近、リタイア後に建物紹介ボランティアをされる方が増えた。首都圏でも迎賓館の案内をされている方や、異国情緒たっぷりの横浜の街を持ち前の語学力を生かして案内されている方がいる。様々な質問に答えられるように、日々努力されていることもあり、どの方もいきいきとして、健康管理と地域貢献が両立しているように思える。

現在、住宅の長寿命化がうたわれ、多くのセミナーが開催されている。またそれに向けての補助金制度も進んでいるのだが、たとえば持ち主が変わっても、その使用方法・住まい方を考えながらリフォームし、存続することの大切さを今回は改めて感じた。



西田恭子氏のプロフィール「一級建築士。「三井のリフォーム」で設計を手かけ二五年。暮らしの創造に貢献する「三井のリフォーム 住生活研究所」の所長に就任。新聞・雑誌・書籍の執筆、各種セミナーで講演を行う。日本女子大学非常勤講師。日本建築家協会正会員。